

## 〈研究ノート〉

## インディオにとっての「500周年」

小林 致 広  
(神戸市外国語大学)

- I コロンを銃殺せよ
  - II 1992年戦争
  - III 先住民の「500周年委員会」
  - IV 10月12日を忘れるな
- 資料A・B

## I コロンを銃殺せよ

メキシコ連邦区当局は、1988年10月12日に次のようなコミュニケを発表した<sup>1)</sup>。「『民族の日』の公式行事は、インディオ人民全国調整委員会(CNPI)とロマス・デル・セミナリオのグループからなるデモ隊によって中断されそうになった。彼らはイスパニア性に反対し、クアウテモクを称賛するスローガンを叫んでいた。」

メキシコ連邦区当局の代表者、駐墨スペイン大使、連邦区選出国議員などが列席した「民族の日」の公式行事は、レフォルマ大道りのコロン像の前でつましくおこなわれていた。婦人警官と動員された露店売人のグループによって警備された会場の中央には、「1992年10月12日、二つの文化の絆」という花文字が掲げられていた。式典の途中にコロン像前に到着したデモ隊は、ロ々にスローガンを叫び、それは国歌演奏中も途絶えることはなかった。「クリストバル・コロンを銃殺せよ」、「裏切り者を銃殺せよ」

「クアウテモク、ばんざい」、「メキシコのインディオ、ばんざい」、「サバタがいたら、われらとともに歩むだろう」

参列していた政治家たちが退席し、式典が終了すると、すぐさまコロソ像前の献花はCNPIのメンバーにより撤去された。デモ隊と動員されていた露店売人のグループのあいだで罵声、怒号が飛び交い、相互に睨み合っている対峙もながくは続かなかった。棍棒と石を手にした一群が突然現れ、デモ隊を無差別に襲撃し始めたのである。15分ほどレフォルマ大通りの交通は遮断された。十数名の負傷者の多くは、襲撃グループにとって識別しやすい「コンチェロスの踊り」の衣裳<sup>2)</sup>を身にまとった人たちであった。連邦区当局によって9月に住居を強制撤去されたロマス・デル・セミナリオの住民グループのリーダーたちは、挑発にのらないで行進するよう立ちまわる。

やがて、笛、太鼓、ガラガラの音にあわせながら、デモ隊はソカロへと向って行進を始めた。「コロソよ、くたばれ」、「クアウテモク、ばんざい」というスローガンがレフォルマ大通りに響き続ける。ソカロでは、「10月12日」を「民族の日」ではなく、「インディオ尊厳の日」として記念行事を挙行するため、いくつものグループが集会を開いていた。

しかし、「コンチェロスの踊り」の衣裳で、踊りを奉納するグループのあいだでも、「10月12日」をめぐる評価は微妙に違う。ソカロ広場の中心で4方位に向いコバル樹脂香を焚き、広場を清め、太陽に祈りを捧げるという「宇宙的儀式」を執行していたグループは<sup>3)</sup>、「10月12日」を「アナクワ先住民尊厳の日」と規定する。アナクワ文化再興運動を推進する先アメリカ文化センターの代表は、植民地主義支配を残存させ、植民地主義的な心性を保持させるためのものでしかない「民族の日」を廃止しようという意志を表明するため、ソカロに結集したという。スペインが推進する「500周年祝賀」事業は、新しい帝国主義支配の一貫であり、ファン・カルロス王の肝入りでメキシコの著名な知識人<sup>4)</sup>に分配された賞や名誉は、かれらを祝賀事業に取り込むためのものと指摘する。このグループは、大陸をアメ

リカと呼ぶことをまづ拒否する。コロンによって「発見」される以前から、この大陸にはイシャチラン Ixachilan (ナワトル語で「広大」という意) という名称があったと主張する。このグループは、8月13日(テノチティトラン防衛の日)や11月2日(死者の日)などでも、CNPI と一諸に集会を組織している。

一方、ソカロの数ブロック北にあるサント・ドミンゴ広場で「メスティソ踊り第2回集会」を挙行したグループの世話役は、「10月12日」を矛盾に充ちた日と指摘している。勝利者の側にたって祝賀するのでも、敗者の側にたって喪に服するのでもなく、両者が共生し、人間らしくなるためにも、「混血化」を祝っていかねばならず、そのため広場で踊りをするという。

「10月12日」を「民族の日」という国家の祝賀すべき日として公式式典を執行してきた当事者の側においても、これらの異議申し立てを考慮すべきだという意見がみられる。政権党 PRI 傘下の全国農民連合の先住民対策活動担当官は、先住民セクターとの会合において、「10月12日」の意味を再検討する必要性を指摘したという。また、コロン像前での公的式典に参列した連邦区選出上院議員(野党 FDN 所属)は、式典を追悼式にすべきで、献花を撤去した反対派の主張に耳を傾ける必要があるとコメントしたという。

CNPI をはじめとする「民族の日」反対派の行動への当局の弾圧に抗議する形で、メキシコ社会党 PMS の週刊誌 *La Unidad* (10月16日号)は、CNPI のリーダーの意見を掲載している。そこでは、スペイン政府が1992年に「アメリカ発見500周年」祝賀事業を企画しているというニュースを知って以降、数多くの会議、シンポジウム、フォーラムを組織し、「10月12日」を「インディオ尊厳の日」として記念するという方針を広めていく作業が、さまざまな先住民組織によって展開されてきたことが語られている。

本稿は、スペイン政府の提唱を契機にして西欧やアメリカ大陸諸国政府などによって企画が進行している「500周年」記念事業に対して「文化的ゲ

リラ戦」を続けている先住民運動の動向とその基本的主張を紹介することを目的としている。

## II 1992年戦争

1980年頃から、スペインのマスコミは「アメリカ発見500周年」を祝賀するため、一連のスペクタクルが準備されつつあることを報道した。1982年に発足したスペインの「アメリカ発見500周年」委員会の呼び掛けで、1984年にドミニカのサント・ドミンゴで、中南米の21ヶ国と米国などオプザーバー諸国が参加した500周年をめぐる国際協議会が開催される。この会議で、メキシコ代表のレオン・ポルティリャは「アメリカ発見」に替るフレーズを提起する。それが「ふたつの世界の出会い」である。こうして「発見—ふたつの世界の出会い500周年」(V Centenario del Descubrimiento-Encuentro de dos mundos)という折衷的で曖昧きまらないフレーズが誕生した。

スペイン政府は、1992年の500周年記念事業に対し7000億ペセタの予算をつけ、バルセロナのオリンピック、セビリアでの博覧会とセットにした国家事業として援助する姿勢を示している。スペイン国内にも、「500周年」を祝賀することに異議を唱える声もあるが<sup>5)</sup>、1992年の「夢」に期待する熱のほうが強い。

カルロス・サウラ監督の『エル・ドラード』、モンセラート・カバジェとホセ・カレラスの創作オペラ『クリストバル・コロソ』さらにはコロソ像と自由の女神の結婚式といった商業主義的見世物、諸種のモニュメントの復原修理計画、出版事業、そして中南米諸国との科学・技術・芸術・文化協力事業と計画はめじろ押しである。1992年10月12日の記念式典を中南米に中継するための通信衛星ロドリゴ・デ・トリアナも打ちあげられる<sup>6)</sup>。

1492年10月12日に対する歴史的、思想的評価から離れて、「学術的に興味深い日」と位置付けた米国は、コロソ記念祝典連邦委員会を発足さ

せ、コロンの航海を模した3隻のカラベラ船による大西洋横断を企画している。その出港式のミサは、ローマ法王が執行することになっている。ローマ法王は、すでにドミニカを訪問した際、新大陸での布教活動開始を記念したミサをおこなっている。

1992年10月12日を「祝賀する」こと自体には、中南米諸国政府は特に異議を申し立てることはない。せいぜい、キューバのカストロ首相のように「発見そのものに反対する理由はなにもない。ただ、記念事業が植民地化と奴隷化を弁明する場となることには同意できない」と注文をつけるのが限度といえよう。コロンビアのベタンクール大統領(当時)のごとく「この出会い」は「スペイン語圏アメリカ」の人々が来たるべき未来にともに参加し、これから持つことになる文化のレパートリーを共同して創出していくよい契機となったとする立場が一般的である。「発見」でなく「出会い」というフレーズが採用されたのは、「われわれラテンアメリカ人は、現在や未来における屈辱に対決していこうとするわれわれを内部分裂させるだけでしかない過去の屈辱に拘泥すべきではない」からであると、メキシコの500周年委員会代表レオポルド・セアは述べている。

スペインの500周年委員会としても「過去に不幸な事件」があったことに頬かぶりを決め込むわけではない。バルトロメ・デ・ラス・カサス、バスコ・デ・キログ、アントニオ・ビエイラなど「良きスペイン人」を先祖にもつことが強調される。1986年10月には、500周年委員会が招待したアメリカのインディオ組織の代表団に対し、スペイン政府と国王は、インディオ民族の復権運動を支持すると表明している<sup>7)</sup>。また、500周年委員会内に組織されたテーマ別部会のひとつ「インディオ」部会は、1988年にアメリカの12ヶ国、26の先住民組織に対して、500周年を記念するには何をすべきか、というアンケート調査も実施している<sup>8)</sup>。

「コロンによるアメリカ発見」は、1世紀前にはなんの衝突、対案もないまま祝賀された。しかし、500周年はそうならなかった。「1492年10月12日、コロンはアメリカを発見した」というのは、歴史上の経緯を記述し

たものではなく、その経緯を解釈したものである。その解釈は、もはや唯一無二のものではありえない<sup>9)</sup>。次章では、1980年代後半、アメリカの先住民運動の諸組織が発表したいくつかの宣言、声明を紹介しながら、かれらの歴史解釈の原点を明らかにしていく。

### III 先住民の「500周年委員会」

スペイン、中南米諸国が、1992年に挙行しようとする「アメリカ発見一ふたつの世界の出会い」500周年記念祝賀事業に対し、アメリカ大陸の先住民組織が、積極的な反対運動を展開し始めたのは、おそらく1985年前後からであろう。

スペインの500周年委員会に招待され、1986年10月マドリーに参集したアメリカのインディオ組織の代表団は、「10月12日」の祝賀に反対する旨のコミュニケを発表している。起草者としては、南米インディオ審議会 CISA、メキシコ・中米・カリブ・インディオ人民地域調整委員会 CORPI、パナマのクーナ青年運動、メキシコのエミリアーノ・サパタ共同体成員連合 UCEZ、さらには CISA の機関誌 “Pueblo Indio” の代表たちの名がみられる。このコミュニケでは、「10月12日」をインディオ人民の諸権利が剝奪され、ヨーロッパの単一文明が強制され始めた日と規定している。そして、1493年5月のローマ法王アレクサンドル6世の教書の無効宣言を要求する。インディオ諸民族の自決権と主権を剝奪してきた、スペインとポルトガルの両王の「神聖なる権利」の無効宣言がなされている。そして、インディオ諸民族は独自の価値観にもとづく発展戦略をもっていると主張する<sup>10)</sup>。

このマドリーでの集会直前にも、アメリカ大陸の先住民組織は、いくつかの会合で500周年に関する対応を討議している。1986年6月末から7月上旬にかけて、エクアドルのキトで開催された第2回ラテンアメリカ先住民牧者世界協議会 Consulta Ecumenica de Pastoral Indígena de América

Latinaはそのひとつである。15ヶ国、30の民族の代表が参加したこの協議会では、「アメリカ発見」と「布教」500周年記念を名目とした勝利者然とした式典を全面的に拒否することが決議された。先住民牧者たちは、「アメリカの発見」や「布教」は存在したこともなく、1492年から今日まであったのは侵略にはかならないと断定する。大量虐殺、先住民の領土略奪、社会・政治・文化組織の解体、イデオロギー的・宗教的支配という侵略の過程で、カトリック教会や他のセクト、宗教法人は、俗権と結託して先住民を支配抑圧してきたと評価している<sup>11)</sup>。

一方1986年7月中旬にニカラグアのマナグアで開催された「国家、先住民の自治と権利」に関する国際シンポジウムに参加したアメリカの先住民組織の代表者たちは、シンポジウム参加者による「アナグア宣言<sup>12)</sup>」とは別に「カリブ宣言」を発表している。宣言に署名した先住民組織は、ニカラグアの3組織(キサン和平派、スカワラ、ミサタン<sup>13)</sup>)のほか、米国の国際インディアン条約審議会とアメリカ・インディアン運動、カナダのフィルスタ民族連合、メキシコのCNPIと先住民二言語職業人連盟 APIBAC、パナマのクーナ青年運動、ブラジルの先住民全国連合、シンガー新聞のほか、グアテマラのキチュ・マヤ、ホンジュラスのガリフォノなどである。

宣言では、ニカラグア大西洋岸の自治計画への支持、米国南部での黒人差別糾弾、パナマ政府によるグアイミ地区での土地略奪非難、米国政府によるコントラ支援と国内でのホビ、ナバホに対する弾圧への非難とともに、「500周年」の記念式典から各国政府が手を引くよう要請がなされている。1992年に予定されている「新旧両世界の出会い」と称する記念式典は、征服記念行事でしかない<sup>14)</sup>と断罪する<sup>14)</sup>。

1987年7月ペルーのオリャンタイタンボ、クスコ、リマで開催された世界先住民審議会 CMPI の第5回総会では、「500周年」に関する基本的態度と1992年に向けた活動方針が提起された。この総会では、1988年1月に予定されていた英国によるオーストラリア植民200周年記念祝典、ニュージーランド政府が1990年に計画するワイタンギ条約締結150周年記念行

事に反対する運動を展開している両国の先住民への支持も表明されている<sup>15)</sup>。

決議文は、「征服500周年祝賀」に反対し、スペインやアメリカ諸国の500周年委員会の単一言語・文化志向の覇権的特性を指摘する。そして、500周年記念と銘うっておこなわれる様々の祭典は、インディオ、アフロアメリカン、クリオージョ、多種のメスティソにとって、侵略や植民地支配のもとで採用されてきた抑圧形式とまったく同種のものであると述べる。そして、500年間におよぶ支配の過程で、インディオ人民が被ったインパクトを学問分野を越え十分検討・評価・批判していかねばならないと主張する。具体的には、「発見」、「ふたつの世界の出会い」、「民族の日」、「イスパニア性の日」、「布教の開始」、「文明」と「野蛮」といった植民地主義的用語の意味を国際社会に正しく伝える必要を挙げている<sup>16)</sup>。

このような研究、討論、広報活動を国内の様々なレベル、地域的レベル、世界レベルで1991年末まで展開することとなっている。1987年9月から1989年9月までは、各テーマの基礎となる文書の準備期間とされ、文書の作成に向け、先住民の諸組織の内部討論、相互協議をおこなうことになっている。1989年9月から1990年9月にかけて、もちよられた基礎文書の調整、取りまとめをおこない、その後文書の配布、広報・情宣を繰り広げるという。

現時点では、CMPIの「500周年」に関する統一合意文書はまだ作成されていない。しかし、1988年4月から1年間のメキシコでの在外研究間に、いくつかの中間的作業文書を手に入れた。論文末尾に訳出した資料Aはそのひとつで、1988年2月にニカラグアで開催されたCMPIの「平和・自治・人権：先住民の展望」セミナーで発表された文書である<sup>17)</sup>。セミナー内の作業部会『500周年委員会』の手で作成されたもので、セミナーでの報告者はニカラグアのアルマンド・ロハスとメキシコのヘナロ・ドミンゲスとなっている。このセミナーは、実質的にはCORPIによって組織されたもので、目的のひとつには、ニカラグア大西洋岸で試行されつつあった先住民の自

治体制の実態の検証や評価もあった。

『500周年委員会』の報告は、「発見」や「ふたつの世界の出会い」、「イスパニア性の日」や「民族の日」、「黒い伝説」と「光輝く伝説」という論争のなかで用いられてきた用語のもつ植民地主義的含意をきっぱりと指摘するとともに、「歴史」、「文明」、「発展」という言葉を独占しようとする西洋中心主義を厳しく糾弾する。報告は、1992年を「先住民との国際連帯の年」と宣言し、500周年記念行事を企画する各国の委員会にインディオの側の見解を提示しながら反対運動を展開するよう訴える。そして運動への支持・支援を第三世界の非同盟諸国、社会主義陣営などに呼びかけ、国際社会での理解を獲得しようと提起する。

すべてがCMPIの第5回総会での方針に沿ったものとはいえないが、アメリカの先住民は多様な機会を利用し、「500周年」に対する自らの見解を表明している。1988年8月にジュネーブで開催された国連の「差別防止、少数者保護」小委員会の第5回作業部会には、巻末で紹介する資料Aを作成したCMPI傘下のCORPIのほか、グアテマラの先住民統一代表団<sup>18)</sup>も参加し、かれらの基本的立場を明らかにしている。

その代表団のひとりリゴベルタ・メンチュウは、現在の中米の現実を正しく評価せずに「500周年」を祝うことはできないと述べ、1992年を「インディオの闘争と抵抗に連帯する国際年」とし、解放と社会正義、平和を獲得するため自らの血を流してきたアメリカの先住民の指導者たちを賛えるべきだと提案した。そして、「500周年」記念のため組織された各種の委員会に、先住民が参画し、どここの国、だれに罪があるかを討議するのではなく、先住民の復権について議論する場を設定するよう要求している<sup>19)</sup>。

1988年10月、ハバナで開催された女性大陸戦線の第3回集会では、エクアドルの先住民民族協議会とパナマのクーナ青年運動のメンバーが、500周年記念式典反対を訴え、さらには、1992年バルセロナオリンピックのボイコットまで呼びかけた。それを受け、集会では、「500周年祝賀」の反対が決議された<sup>20)</sup>。

「500周年祝賀」に対して、アメリカの先住民組織がさまざまな抗議運動を展開していることに、スペインの500周年委員会がまったく対策を講じなかったわけではない。1988年に「インディオ」部会が実施したアンケート調査もそうしたもののひとつであろう。寄せられた回答には、アメリカの先住民運動の諸組織の対応の微妙な差異が現れている。ボリビアのタウンティンスーユ・インディオ戦線のように、「無主の地アメリカ」という文言があるアンケート自体を撤回するよう要求し、「ヨーロッパは、人類の頭に虚偽と犯罪の哲学をつめ込んだ売春婦であり殺人者であると宣言すべきだ」と、激しい姿勢を示すものから、同じボリビアの先住民農場労働者・農民総連盟のように穏和な路線を打ち出すものまでである。後者は、人類の発展のために「現在のスペイン」と協働すべきだという。

この両極ともいえる主張のあいだで、ヨーロッパ人、アメリカ在住のヨーロッパ人の子孫たちの記念委員会とは別個に、アメリカのインディオによる委員会を組織し、これまでまったくなかった「対話」や「出会い」を開始していく準備を1992年に向けておこなうべきだという主張が、ペルーのインカ民族間連盟 AINI によっておこなわれている。また先住民組織の大半は、各国における500周年委員会そのものに、先住民が参画し、計画を立案していくべきだという意見を表明している<sup>21)</sup>。

当然ながら個々のインディオ組織は、独自の歴史を踏えた世界観、歴史意識のなかで、500年の歴史を具体的に位置づけている。巻末に訳出した資料Bは、メキシコのインディオ人民自主戦線が、1988年10月12日に際して発表した宣言であるが<sup>22)</sup>、そこにはメキシコのインディオ運動の一部に共通する歴史意識がはっきりと登場している。それは資料Bの中にある「第6の太陽」という言葉である。これは、スペイン人到来前の時代を「第5の太陽」の時代とするアステカの歴史観を基盤にした概念であり、植民地期から現代に至る支配と抑圧の暗闇の時代が終了し、やがて新しい時代が到来するという考え方を示している。しかし、一部の偏狭なアステカ至上主義のように、メスティンを排除するとか、すべての西洋的文化を拒絶す

るといった時代錯誤的要求が前面に出されることはない。その宣言は、はっきりと連帯すべき相手を見定めている。

#### IV 10月12日を忘れるな

紹介した資料群は、アメリカのインディオの諸組織の多くが、こうした運動は排他的な自民族至上主義だけでは大きな力を持ちえないと認識していることを示す。非インディオ諸セクターの組織との対等な関係により運動を展開することは不可欠である。しかし、そのためにも「アメリカ発見」、「ふたつの世界の出会い」といった発想自体が、極めてヨーロッパ中心主義でしかないことを、それらのセクターにはっきりと明示することが必要なのである。スペインに、過去の侵略による大量虐殺という「不幸な出来事」を認知させ、「黒い伝説」の告発者たちをスペインの良心の使徒として顕彰させようとしている訳ではない。「近代国家」に吸収されるべき少数民族集団 *etnia minoría* としてのインディオの諸集団は、独自の発展戦略を自ら決定する能力や権限をもたず、政府の開発統合政策の対象でしかないという思考そのものを拒否しようとしている。

1492年以降、「隠蔽された」アメリカ先住民の歴史と文化の多様性を、もう一度「発見」することが要請されている。多様な生活様式を発展させてきた先住民族集団をインディオという単一のカテゴリーにまとめることで、インディオは歴史の主体たることを拒否されてきた。しかし、いまやインディオの数多くのグループは、その存在、その領土、政治参加と自治、母語使用や母語教育など先住民族としての諸権利を獲得するため、現在の支配体制の根本的変革を模索している。そのためにも、500年にわたりすべてを略奪されてきた先住民族の歴史意識、世界観を単なる議論や考察の対象とみなしてきた、これまでのわれわれの姿勢を再検討していかなければならないであろう。

「500周年」記念反対の運動を、インディオたちだけの運動と片付けるこ

とは完全な誤りである。「10月12日を忘れるな」というインディオのスローガンに唱和することが求められているのではない。その叫びが厳としてあることを認識し、その叫びを受けとめ、この500年の歴史をかれらとともに評価していく作業を始めていくことが要請されている。

資料 A：CMPI「平和・自治・人権—先住民の視点」セミナー『500周年委員会』報告

### 序

他者を顧みない一方的なスペイン中心主義は、現在という時点においても、その根を植民地時代のノスタルジーに深く伸ばしている。われわれの大陸にいまだスペイン中心主義が存在していることをはっきりと証明するのが、500年間の侵略を「発見」あるいはふたつの世界の「出会い」といい繕い、スペインが1992年に開催しようとする祝賀事業である。

アメリカにおけるわれわれ先住民のこの500年間の歴史の深部に立ち入り、各時代を歴史の文脈に照らし合せ分析すれば、われわれはきっぱりと次のように断言できよう。哀れなまでに有名となったクリストバル・コロンの航海は、偶然の産物でも、科学的探究心にもとづくものでもなく、野望にみちた強大なスペイン両王の利権から産れたものであった。貴族階級ならびに当時の政治や経済の実権を掌握していた人々を代弁していたスペイン両王は、インド大陸に到達する最短航路を探索することに大変関心を示していたにすぎない。

1492年、コロンはカリブ海の島々に侵入した。やがて、スペインでは、先住民の土地への関心が異常なほど高まった。この関心は好奇心によるものでなく、富裕になりたいという渴望、とりわけ黄金への欲求と不老の泉への欲望が産み出したものだった。

アメリカの富への欲望を充足させようと、スペイン帝国はあらゆる力を行使し、アメリカの大地を本来所有していた人々から略奪し、かれらを奴隷とし、抑圧し、さらには絶滅させてしまった。

スペイン帝国の権勢が傾くと、覇権は新しい帝国主義イギリスが握った。イギリスは間接統治という新しい支配の方式で、「植民地化」事業を一層推し進めていった。新帝国主義は、土地を占領するため人々を絶滅させてしまうより、労働力として徴発できるよう人々を確保しておくことに精力を注いだ。当時の人間関係の寛大さを示すものとよく解釈されがちなこの巧妙な支配体制こそ、スペイン帝国を葬り去る重要な要因であった。

500周年祝賀を5年後にひかえる現在、新しい帝国主義はアメリカ合州国となっている。500年の歳月とともに支配はより巧妙となり、帝国主義は諸国家を従属させ、国家の富を略奪してきた。帝国主義は先住民対策を講じ、先住民と国民の他のセクターとの差異を一層深め、差別、周縁化、搾取は日常的に展開していった。先住民政策の大枠は、先住民を消費社会に統合するか、それとも南米の諸国であったような先住民の肉体的抹殺をおこなうかであった。従属している諸国を無力にしておくという帝国主義者たちの命題により、このような状況が生じたのは明白である。

スペイン人の犯した残虐行為が、先住民の意識のなかにしっかりと刻印され続けるのはまちがいない。その意識こそ、先住民が現在も抵抗を継続する歴史的根拠といえよう。それとともに、500年間のうちに覇権をにぎるものの政策も変化し、われわれを1492年当時以上に非人間的に抑圧する帝国主義勢力がもたらした害悪を客観的にみても感じ取れるという事態についてもわれわれは自覚すべきである。

500年に及ぶ支配と抑圧に対し、斗争、戦斗、勝利、英雄的行動を展開した500年がある。全時代をつうじ、代々の帝国主義が押しつけた抑圧の鎖りを振り切り、打破するため、世界のいたる所で途切れることなく流された血みどろの500年がある。現在、われわれの完全な自由を獲得するためには、いままで以上に抵抗を継続することが、歴史的に要請されている。

先住民が抵抗し獲得した成果のひとつが、ニカラグア大西洋岸の先住民が享受している自治体制である。自治体制は、先コロンブス期から数千年にわたり先住民が堅持してきた歴史のある諸権利を尊重し、それらを行使

できるようにすることである。世界の多くの先住民が歴史的な諸権利を効率的に行使するうえで、自治は適切な形態といえる。つまり、500年におよぶ抑圧の歴史のなかには、500年のうちに先住民が勝利し獲得した様々の成果も含まれる。

### 決 議

アメリカへの植民地侵略が始まって、もう500年が間近となっている現在でも、インディオ、アフロアメリカン、クリオージョ、さまざまなメスティソからなるわれわれ人民は、政治、経済、社会、生態系におよぶ複雑した支配体制のなかで、つねに言語的、文化的な抑圧操作にさらされ続けている。

自由主義、開発主義あるいはテクノクラート主義と、時代や政治状況により名称は変わるが、支配者のイデオロギーによって、言語の抑圧がなされる。

われわれ先住民、そして大陸の尊厳に対し永続的に影響をもたらす、過去および現在の諸行為が、現在という時点で一体となって絡みあって存在している。

以上の諸点を考慮し、植民地主義が隠語として頻繁に使用している以下の諸表現を断乎として拒否することに、われわれは合意した。

「発見」：あらゆるテリトリーの正統な発見者は、そのテリトリーに最初に居住した人々にほかならない。

「民族の日」：大変こみいった支配の過程を人種という単一の条件に還元し、支配された人々を支配者と同じ次元にたたせ、優越した人種というモデルを永続させようとする。

「イスパニア性の日」：社会、文化的視点からみて、この表現は差別である。われわれ人民は、過去だけでなく現在においても、時としてひとつの国家のなかで、多様な民族が複合し織りなす多民族集団の特性、多文化的特性をもち続けてきた。

「ふたつの世界の出会いはひとつだけでは

ない。植民地支配の過程で、アフリカを含め数多くの文明が合流してきた。

ふたつの世界のうちの一方の側に不平等で不利な条件を押しつけ、現在の帝国主義支配の時代に至るまで、侵略と植民地主義による支配・搾取の過程をひき延ばしていることを考慮すれば、この「出会い」という自称表現は本質を大きく歪曲したものでしかない。

「歴史への編入」：われわれ人民の数千年におよぶ口誦伝承の示す歴史性を勝手に否定し、文字の到来した1492年10月12日以降のみをわれわれ人民のもつ歴史として西洋式の歴史の枠組に位置づけようとする。

「文明への編入」：自分たちとは違う人民や諸文明の尊厳を否定し、攻撃するために、「文明」は自分たちだけのものと考え、「文明化していない」とか文明化の途上という植民地主義的表現を使用する。

「発展への編入」：われわれを抑圧する覇権モデルにもとづき、きわめて西洋中心主義な枠組のなかで進歩や発展を理解する。

「母なる祖国」：この表現は、過去から現在に至る植民地主義勢力の恩恵を感謝している臣民として、われわれをみなすものである。

「部族」：この表現は、現在ではすでに超越されたある文化の「段階」、「相」、「期」に属する歴史のない人民として、われわれを呈示しようとする悪意にみちたものである。このように命名し、われわれが「文化年齢の若い」存在で、植民地主義や帝国主義の野望に従うのが当然だといくめる。「部族」という用語を拒否し、かわりに人民や民族という用語を取り戻そうというパナマで開催された世界先住民審議会の第4回大会で提起された決議に、われわれは賛同する。

「未開人」：この表現は、人種主義、植民地主義的であり、われわれのもつ世界観、共生様式が示す複合性、統合性を否定しようとする。未開という用語を差別的に使用することは、「文明化された」ものに対して「野生」とか「野蛮」という用語を対置して使用することと軌をいつにする。

「黒い伝説」対「光輝く伝説」：ヨーロッパの列強が、獲物の分捕り合戦のなかで繰り広げた、いわゆる「黒い伝説」対「光輝く伝説」という議論

を克服し、さらには人民の解放斗争、文明相互の真の対話と文化交流をおこなうという展望にたち、真摯な歴史判断をするためにも、インディオ人民、インディオ運動は、500周年を建設的で批判的な評価にもとづいて理解すべきである。

それゆえ、われわれは宣言する。

1. われわれは、500周年を祝うべき出来事であるとは決して認めない。  
2. われわれは、1492年10月12日に関しては、毎年、それを記念すべきだという主張を唱え、インディオの立場を支援するように、国際社会に働きかけることに同意する。

3. われわれは、ヨーロッパ人のインディオに対する態度を変えていくため、法的措置を含め有効な手段を用い、価値観を変換させねばならない。

4. 侵略、そして抑圧操作をおこなう連中によるキリスト教布教の500周年を祝賀しようとするすべての計画に反対する立場を示すべきである。そのためにも、国内だけでなく国際社会にむけて宣言を公表すべきである。

5. ヨーロッパ列強による植民地支配よりはるかに激烈な形で、われわれ人民が現在直面している現実の問題を検討しなければならない。アメリカのインディオたちの支配は、スペインだけでなく、他のヨーロッパ諸国によってもおこなわれた。コロンの到着直後に起きたことだけでなく、その後の500年のあいだに生じた諸変化にも、われわれは眼をむけねばならない。

6. 帝国主義がわれわれに対して示す関心や態度を十分考えねばならない。理性に対して暴力で応じ、人権を踏みにじる帝国主義とわれわれは斗わねばならない。過ちにみちた出来事を祝賀することは、帝国主義の打倒とともに終焉を迎えるだろう。

7. インディオ組織としてわれわれが提起したものを各国の記念行事実行委員会に対して明示し、働きかけていく。

8. 1992年を「先住民との国際連帯年」と宣言する。そして、1988年8月開催予定の国連の「差別防止、少数者保護」小委員会の作業部会に提出

する文書をまとめる作業をおこない、この機関が文書を検討し、意見を表明するよう働きかける。

9. 第三世界の非同盟諸国、社会主義陣営そしてアフリカ民族会議 ANC が、インディオ人民の決意と復権を支持・支援してくれるよう働きかける。

(以下、世界諸地域の先住民との連帯に関する決議、ならびにアフリカ人民、アフロアメリカンの状況に関する決議は略する)

**資料 B：インディオ人民自主戦線宣言** インディオ人民自主戦線 (FIPI) は、「アメリカ発見」500周年を祝賀することに反対であると宣言する。500周年の記念するため、民族集団の自決、われわれが犠牲となってきた歴史的略奪の補償だけでなく、われわれの領土の返還へと繋り、われわれの共同体に直接利益をもたらす、具体的な政治活動を宣言する。

帝国主義が祝おうとする500周年祝賀を拒否することはメキシコのわれわれのなかますべて、いや大陸の先住民のなかますべてが分ちあっている気持ちである。「ふたつの世界の出会い」とか「ふたつの文化の出会い」として、1992年10月12日に祝賀式典をすることが、われわれ人民への暴力、略奪、抑圧を正当化しようとする企てであることを、インディオのあらゆる組織、共同体は警告する。この暴力は以前から存在し、いまでも続いている。

スペインの侵略に抵抗し殺された何百万というなかまの殺戮を、どうしてわれわれが祝えるのか。植民地主義の抑圧のくびきのもと、何百万ものなかまが、奴隷、衰弱、困窮、飢餓によって死んでいったことを、どうしてわれわれが祝えるのか。侵略者たちの集団的暴行の犠牲となったわれわれの母や祖母たちの屈辱に対して、どうしてわれわれは一緒に拍手喝采することができようか。

われわれがこの祝賀式典に参加することは、われわれの大義を放棄することである。われわれを抑圧する状況の存続を受動的に卑屈になって受け入れることを意味する。われわれインディオは、植民地主義や帝国主義の

蛮行の共犯者となるつもりはない。われわれインディオは、植民地時代のあらゆる蛮行の起原となったあの犯罪を祝い、人民の抑圧を進めようとする帝国主義の旗持ちなぞしたくない。

とはいうものの、インディオ人民自主戦線は以下の宣言を出す。われわれ人民は、500年に及ぶインディオの抵抗を記念したい。われわれは、侵略から500年が経過したにもかかわらず、存在しており、けっして消滅するつもりもない。1992年は、われわれ人民の告発と自由への叫びの国際年とすべきである。母なる大地の内奥から生まれ、第6の太陽の到来を告げるインディオの抵抗の叫びの年である。第6の太陽は、われわれの父クアウテモチンが到来すると予告したものであり、すでに到来している。大地は揺れ、眠っていた人々も覚醒した。眼を大きく開き、新しい太陽、第6の太陽、大義の太陽を見つめるのだ。

1992年はインディオの抵抗を呼びかける。1992年は、われわれを犠牲にしてきた連中の暴力と略奪行為について、アメリカのインディオ人民に許しを乞う行為をすべき年である。しかし、もう疲れるほど聴いてきた言葉だけの許しではない。われわれの諸権利をわれわれに返還し、人民としてのわれわれの自由、われわれから奪った資源、略奪した領土を取り戻すことになる具体的な活動によって許しを乞うべきだ。

しかしながら、こうした行動を具体化するため、1992年が到来するまで待つべきではない。1992年までに、われわれの要求に対する具体的回答が得られるよう、いまから手段を講じるべきである。インディオ人民自主戦線は、いまから働きかけ始めるべき行動計画を提起する。

1. われわれインディオは、「アメリカ発見」、「ふたつの世界の出会い」、「ふたつの文化の出会い」の500周年とか、「布教の500周年」を祝賀することに反対することを表明した文書を発表し、いまから告発をし、働きかける。名称がどうであれ、その目的は同じである。以前から存在し、今も続く、暴力、略奪、抑圧、大量虐殺、民族虐殺を正当化することである。

2. 全世界にむけ、1992年を「インディオの抵抗国際年」とすることを

表明する。

3. われわれの大陸の諸国の暦から、10月12日を、「民族の日」あるいは「イスパニア性の日」として祝賀することを一掃し、「インディオ抵抗の日」と変えていく。

4. 1992年、アメリカのすべての国で、われわれの自治権を認知し、われわれの領土を返還し、われわれを犠牲にした略奪の補償をすることにより、10月12日を記念する。

5. われわれの団結を強固にし、われわれの作業計画と闘争の戦略を策定していくため、われわれインディオが参加する会合、集会、行事をおこなう日として、われわれの大陸のすべての国で、10月12日を定めるべきである。

6. われわれの正当な闘争を支援するため、国際連帯だけでなく、われわれのなかまである抑圧されたメスティソ、民主的意志をもつあらゆるセクターとの連帯を呼びかける。

## 注

- 1) 1988年10月12日に関する以下の記述は筆者の見聞および、*La Jornada*, *El Nacional*, *Excelsior* 紙の10月13日版にもとづく。
- 2) アステカの踊り、チチメカの踊りともいわれ、踊り手たちは先スペイン期の衣装、羽根飾り、そして足首や手首に貝型のガラガラを付けている。そのためにコンチェロスと称される。
- 3) このグループについては、拙稿「アナワク文化再興運動」『南欧文化』12, 1987年を参照されたい。
- 4) オクタビオ・パスやカルロス・フエンテスを指すと思われる。
- 5) 1988年10月12日バルセロナでは「アメリカ発見500周年反対カタロニア委員会」がスペイン国旗を燃して示威行動をしたという。
- 6) 以上の記述は、Araceli Hernández, “Descubrimiento o Etnocidio? Un término demasiado ambiguo” *Etnias*, 5, 1988, pp. 17-19 などにもとづく。

- 7) “Reunión de indios” *Etnias*, 5, 1988, p. 64.
- 8) Araceli Hernández, “En 1992 debe iniciar real encuentro América y Europa” *La Jornada*, 1989年10月13日付。
- 9) Edmundo O’Górman, “La invención de América” *América, Hombre y Sociedad*, Diputación provincial de Granada, 1988, pp. 99-108.
- 10) 前掲注7) 参照。
- 11) II *Consulta Ecumenica de Pastoral Indígena, Aporte de los pueblos indígena de América Latina a la Teología Cristiana*, Ediciones Abya Yala, Quito, 1986, pp. 85-87
- 12) シンボジュウムとマナグア宣言については“Consideraciones sobre el proceso de autonomía en Nicaragua y la cuestión étnico-nacional en las Américas” en Hector Díaz-Polanco, *Etnia, nación y política*, Juan Pablo Editor, 1987, pp. 151-157 参照。
- 13) ニカラグアの先住民組織については、拙稿「ニカラグア大西洋岸における自治問題—サンディニスタ側提案と先住民側の対応—」『神戸外大論叢』38-2, 1987年を参照。
- 14) “Declaración del Caribe” un volante
- 15) 後者に関しては、1989年8月北海道で開催された世界先住民族会議でも決議されている。「世界先住民族会議決議」ピープルズ・プラン 21世紀『1989年夏・国際民衆行事報告集』東京, 1989, pp.74-83.
- 16) “V Asamblea General” en Rodolfo Stavenhagen, *Derecho indígena y derechos humanos en América Latina*, El Colegio de México, 1988, pp. 203-205
- 17) CMPI, *Seminario-Taller “Paz, autonomía y derechos humanos : La perspectiva indígena”*, Managua, Pto-Cabezas, Waspan, 1988.
- 18) 代表団は、農民統一委員会 CUC, グアテマラ協働組合運動, 高原農民委員会 CCDA, の代表で構成されていた。
- 19) Roberto Zamarripa, “Propone Menchú una declaración universal de los derechos indígenas” *La Jornada*, 1988年8月1日付。

- 20) Sara Louera “Denuncia de mujeres en La Habana” *La Jornada*, 1989年  
10月13日付。
- 21) 前掲注8) 参照
- 22) “Frente Independiente de Pueblos Indios” *Etnias*, 5, 1988, pp.42-43